

会議名	伊藤忠・バイオミン飼料畜産セミナー2007
開催日時	平成 19 年 9 月 19 日
開催場所	伊藤忠商事株式会社 10F 第会議室
主催者	伊藤忠商事株式会社
参加人数（概数）	300 名
1. 会議の概要 （資料添付）	<p>7つの演題について話題提供があった。</p> <p>(1)「世界の飼料畜産業界の未来図」～変化の波に乗り遅れるな！～ BiomинGmbH 最高経営責任者 EricErber 氏 畜産を取り巻く情勢を政治・経済・社会・技術に分けて解説し、今後の畜産の発展する地域を人口増加率と GDP 増加率から、東南アジアおよびアフリカ諸国と予測し、Biomин 社として、この地域に集中的に投資する戦略を紹介した。</p> <p>(2)「米国のエタノール事情と最新の技術による副産物の栄養効率向上」 QualityTechnologiesInternationalInc. 副社長 TroyLohrmann 氏 トウモロコシからエタノールおよび飼料として栄養価の高い DDGS の製造技術の最近の開発状況について説明があった。しかし、エタノール生産におけるエネルギー効率については全く触れていなかった。</p> <p>(3)「逼迫度を強めた世界の穀物需給」 伊藤忠商事(株) 食糧部門市場調査室長 岩崎正典氏 世界の主要穀物の生産・需要について変動要因を分析し、需給曲線の移動をもとに価格変動のメカニズムについて解説があった。また、伊藤忠が提供している、穀物需給に関するデータベースの紹介があった。</p> <p>(4)「飼料はどれほど安全なのか？」 ウーン獣医大学教授 MaximilianSchuh 博士 飼料に含まれるカビ毒、重金属等の危険因子、汚染飼料による家畜の健康被害が紹介され、これに対して、各生産者が、HACCP を採用する必要性と EU が採用している食品および飼料に関する迅速警報システムについて紹介があった。</p> <p>(5)「植物性乳酸菌の畜産における利用」 アサヒビール株式会社 研究所 石田哲也研究員 ビール粕を培地として培養可能な乳酸菌の選別、開発した乳酸菌発酵パウダーの給与が実験動物の好中球貪食能、NK 細胞の活性などの自然免疫を活性化する事例が紹介された。</p> <p>(6)「年 30 頭離乳 - 現実か空想か(養豚関係)」 ジェヌサス・ジェネティック社(カナダ)代表 JimLong 博士 ジェヌサス・ジェネティック社(カナダ)が種豚を供給し、技術指導を行っている養豚農家で子豚の離乳頭数が、30 頭/母豚/年を達成した事例が紹介された。</p> <p>(7)「高機能性飼料の使用は生産性を高めるのか？」 BiomинGmbH チーフニュートリショニスト FranzWaxenecker 博士 高機能飼料ということでその定義や内容に期待したが、実際は抗生物質の使用が禁止されたことに伴って、消化管内の病原性細菌を無毒化するナチュラルバリアを強化するための飼料についての紹介であった。ほとんどわが国でも実行されており特に新しい知見はなかった。</p>

	<p>以上の講演では途中で昼食・休憩をはさみながら質問を受け付けずに進行した。予定よりやや遅れて17時15分より質疑応答が行われたが、エタノールの発酵残渣のアミノ酸組成(質問者は、味の素研究所)など。細かな技術的な質問が多かった。</p>
<p>2 .今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>トウモロコシでんぷんからエタノールを製造する流れが加速している中で、その副産物の飼料利用にあたって、栄養効率向上やハンドリング問題など飼料的な利用技術の開発は急務と思われる。同時にLCAによるエタノール製造工程のエネルギー効率、環境への影響等を畜産の視点から検証する必要がある。</p>
<p>3 .その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>特になし。</p>
<p>4 .今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>2 .に同じ</p>
<p>5 .会議の所感</p>	<p>全般に新しい知見は少なかったが、主催者の商品の宣伝が少なかったことはよかった。</p>
<p>報告者</p>	<p>伊藤 稔</p>